

この問題の解決が見つからない限り私達はまたしても六道輪廻の世界とって迷いの世界を巡らねばならないのである。久遠の昔から私達はこの問題を抱えて命を繰り返してきたのである。この命、この人生を逃したらいつまたこの問題を解決することができるのであろうか。このことを考えると、私達はこの問題を解決せずにこの命を亡くすことはできないのである。阿弥陀仏という仏さまは、そんな問題に悩んでいる私達を見て下さって、こんな人間を放っておくことはできない、なんとかしなければならぬと決心してこの世に出てきた下さった方である。阿弥陀仏はそんな人間を見てなんとかしなければと血の涙を流して下さっているとお経には書いてある。それほどに私達というのは自らの問題が見えていないのである。本当に急がねばならないことは、実はこの生死の問題を解決することであつたといえる。この世の問題はこの世で何とかなるのである。この世の問題でない問題、それが生死の問題の本質なのであるが、その問題を解決しなければ、いくら自らの命を絶つたとはいえ、それは一時的なものであつて、本質の解決にはなっていないのである。私達は自らの自死の問題を考える時に、このことについてじっくりと思いをいたさなければならぬ。今ここで解決をつけるか、あるいは自らの命をいったん絶つて一時この世を逃れてまたもやこの迷いの世界に還ってくるかそれは私達自分自身にまかされた選択であらう。

Published by the Buddhist Churches of America,
Southern District Ministers' Association with
funding from the Southern District Council.

Southern District Temples

- Arizona Buddhist Temple
- Buddhist Church of Santa Barbara
- Buddhist Temple of San Diego
- Gardena Buddhist Church
- Guadalupe Buddhist Church
- Los Angeles Hampa Hongwanji Buddhist Temple
- Orange County Buddhist Church
- Oxnard Buddhist Temple
- Pasadena Buddhist Temple
- San Fernando Valley Hongwanji Buddhist Temple
- San Luis Obispo Buddhist Church
- Senshin Buddhist Temple
- Venice Hongwanji Buddhist Temple
- Vista Buddhist Temple
- West Los Angeles Buddhist Temple



Buddhist Churches of America

<http://buddhistchurchesofamerica.org>



自死について

浄土真宗において「自死」の問題をどう考えるかについて私見を述べてみたい



ガーデナ仏教会 開教使 宮地 信雄

自死は悪か？

自死とは、自らの命を断つということで定義していると思うが、その決定に至るまでには様々な課程が考えられる。その一つ一つには本人でなければ到底分からない複雑な因子が考えられるが、それを今ここでは、一応「業」の問題として取り扱うことにする。仏教で「業」というとこれまた難しい問題を色々含むことになるのだが、この小論が仏教徒に限らずに読まれる可能性を考えて、ここでは一応「我々の日常の生活体験」を業の定義として論を進めてみたいと思う。我々一人一人の生活体験というものはすべて違っている訳でそれを、ひとまとめにして我々の生活体験はこうだということはできない。つまり、業というのはその人その人によってすべて違っているのである。確かに似通っている業、また同一要素を持った業というのもあるであろう。それを仏教では「共業（ぐうごう）」と呼んでいる。時代的なもの社会的なもの等様々な共通した生活体験を送るとき、我々はこの共業を共有することになる。しかし、それは我々の業の一部であって、それがすべてを決定するとはいえないのである。その人の業という問題を考えるとき、そのことは大きな影響力をもってくるとはいえるが、やはりまだそれはその人そのものではない。それぞれの人の業というのは決定的に違っているのである。その業の上にたって我々はこの自死という問題を考える時、それをひとくくりにしてこうであると決断を下すことができないものであるということが分かる。つまり、自死はいいのか悪いのか、自死は許されるべきものであるのかそうではないのか、そういった問題ではないということを一応私達は了解しておかなくてはならない。

自死に是非の判断は無意味

ある人が悩んだ末自らの命を絶った。その人がそう決断するまで、誰にも分からない苦悩があったに違いない。その苦悩は後から考えてみると、ああでもないこうでもない私達のそれこそ業に照らして色

々いうことはできるであろう。そして、その我々の生活経験から割り出した様々な意見によってこの人はここで死ぬべきではなかったと結論したとしよう。その結論した結果をもって今日の前に横たわっている自死の人を見て一体何ができるのかというのであろうか。ある人はいかもしれない、こんなことがまた二度と起こってはいけないから、私達の意見をどこかに残しておかなくてはならないと。この人の意見は人間の業というものを全く理解していない、薄っぺらな道徳意識で飾られたごくごく一般的な、常識的なものに過ぎないのであろう。そこから出てくる結論は絶対に次の自死者の助けにはならないのである。なぜなら、われわれは他人とは絶対に違う生活経験をして生きているのであるから。

自死に常識は通用しない

現在日本の自死者の数はちょうど交通事故で亡くなる人の6倍だという報告がある。この傾向は多分世界のいわゆる先進国といわれているどこの国でも見られるものではなからうか。つまり日本では一年に約3万人の人が毎年自らの命を絶っているのである。そのことが新聞等で報告されるたびに、色々な人が色々な意見をおっしゃる。その気持ちはこのような痛ましいことが二度と起こらないようにとの親切心からであろう。それはそれで傾聴に値することであろうが、それだからといってこの3万人という数が減った、あるいは減っていくということはいえないのである。いや、ますますこの数は勢いを増しているといわれているのである。つまり、そういった意見がひとつもこの人たちの助けにはなっていないということかもしれない。自死の問題は複雑を極めていたので先述したように一括していえるものではないのである。社会がよくなれば自死者の数も減ると考えたのは一昔前のことである。こんなに世の中が豊かになり、昔とは比べ物にならないほどすべてが進歩した今になってもその数は一昔前の倍以上になっているのである。世の中がよくなればとか何かが変わればという建前論はもう止めなくてはならない。

浄土真宗では自死をこう見る

浄土真宗では、それではこの自死問題についてどういふのであろうか。私達がいえることは、命の問題についていふことができるだけである。私達の命は両親から戴いた尊い命である。この命はかけがえのないものである。誰も取って代わることのない命である。お釈迦様がお生まれになったとき、「天上天下、唯我独尊」とおっしゃたといわれている。この宣言の意味は、私が両親から戴いた命をこれから私自身が生きていきます。その意味でこの命は尊いのであります。この意味で私達すべてが尊いのであります、ということと言われたのであろう。すべての人が尊い、すべてのものが尊いのである。この尊い命を生きている私達がその尊い命を粗末にすることはできない。つまり浄土真宗の教えから戴くと、この尊い命を捨てる自死という行為はなんともったいないかということしかいえないということなのだ。父や母が命がけになって生んでくれたこの尊い命を無駄にするということは本当にもったいないことではないか。これは命を大切にしようとかものを大切にしないともったいないという様な単なる道徳論でいっているのではない。ここで私がもったいないといっているのは、浄土真宗の立場から、つまり宗教的な意味からいっているのである。宗教的な意味とは、自らの「生死の解決」をつけているか否かということに焦点を置いているのである。この問題に解決をつけることなしに私達の命を断つということは、これほどもったいないことはないということを行っているのである。浄土真宗という宗教から見れば、この世に私達が生を受けたのは、何も楽しい思いをする為だけのものではない。それは、私達がどうしても逃れることのできない最大の業である「死」という問題を解決する為にこの世に出てきたのである。